

ちょうど150年前の  
1867年9月、カール  
・マルクスの『資本論』  
第1部が発刊されまし  
た。私と『資本論』の出  
合は42年前。以来すっ  
かりはまっています。い  
まも若い人たちとの読書  
会を行っています。

何がそんなに魅力的な  
のか。一言でいうと学問  
的な「汎用（はんよう）  
性」（いろいろなことに使  
える性質）の高さです。  
『資本論』は資本主義社  
会を本当に深いところか  
ら捉えています。そのため、  
社会の表面に現れる  
さまざまな出来事を、長  
い歴史的な視野の中で、  
理論的に捉える力をもつ  
てしているのです。

# 『資本論』発刊150年

る経済が金融に比重を移

し、バブルに振りまわさ  
れるようになるのはなぜ

か」「家事労働は資本主  
義の経済はどう組み入れ  
られているか」「多産多  
死から多産少死へなどの  
人口転換が起こるのはな  
ぜなのか」など、『資本  
論』は幅広い社会問題に  
根本的な説明のメスをい  
れています。

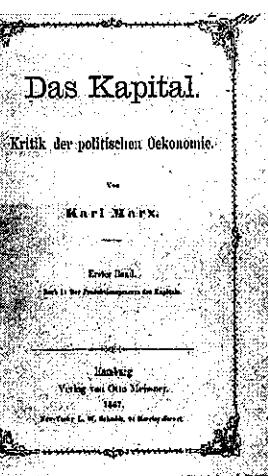
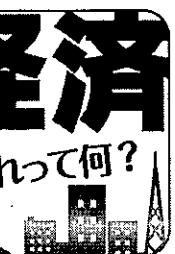
大げさでなくそれは、  
学問じよりよじ社会をめ  
ざす運動にとっての宝の  
山となっています。

では、その根底にある  
『資本論』が資本主義  
社会を深く捉えている  
ところのはどういうこと  
でしょう。

一つ挙げる限り、それは  
は資本主義社会を“長い  
人類社会の経過的な一段  
階”と捉えることを、は  
っきり前提しているとい  
うにあります。資本主義  
社会は、他のすべての社  
会と同じように、先行す  
る社会の中から生まれ、  
次の社会に席を譲ってい  
く。その意味での歴史的

な発展法則の説明を、  
『資本論』は研究の「最  
終目的」にしています。  
ですから『資本論』は  
資本主義を「肯定的理  
解のうちに…その否定、そ  
の必然的没落の理解を含  
む」という弁証法的  
な方法で捉えます。  
資本主義のしく利潤第  
一主義で労働の搾取を深  
めていく（否定）が、  
には労働者階級の発達が  
重要な要因として含まれ  
ることが、骨太くえぐ  
りだされています。それ  
は高揚する現代の「市民  
運動」（多くが労働者と  
その家族による）を捉え  
る基礎的視角を与えるも  
のにもなるでしょう。

現代日本、とうとう  
よく取り上げられるのは  
富と貧困の対立（経済的  
な格差）や、労働条件の格  
別などひとつの類似です。  
しかし、その生命力は、  
労資関係の枠にとどまる  
ものではありません。  
たとえば、「資本主義  
の下で地球環境問題が起  
じるのはなぜなのか」「  
「みんなの暮らしを土台とす



## 現代的生产力持つ汎用性